vol.57 2023 夏号 源流からのたより

ぽたり

源流のひとしずく

水のとどくところ

Key Word

- 大滝ダム 10周年の年に
- 何を考えるか、思うかは、子ども自身
- 吉野川紀の川流域の生きもの
- 川上村自然観察研究会のみなさんと
- 和歌山平野を潤す "宮井用水"
- 村づくりに役立てていこう！

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語
森と水の源流館
奈良県吉野郡川上村大字迫1374-1
https://www.genryuu.or.jp

おおたき龍神湖・大滝ダム管理運用開始10周年の年に

平成25年（2013年）3月23日、川上小学校の体育館で大滝ダム竣工式が挙行されました。同じ日、「おおたき龍神湖」と名づけられた湖の畔では、湖名碑の除幕式も開かれました。それから10年の時間が経ちました。運用開始までに、50年以上もの歳月を費やしたダムです。そこにはいつも「時の重み」というものを感じずにはおれません。今年も単なる10周年の記念としてだけでなく、あらためてこのダムがつくられた川上村を見つめなおし、この先へとつながる「水源地の村」の未来を考える1年にならなければいけないと思います。

この財団も、いくつかの事業に部分的にでもかかわる機会があると思います。その中では、「時の重み」や「時の重（かさ）なり」をじゅうぶんに意識し、取組みたいと考えています。森と水の源流館では、大滝ダムとあわせて「緑のダム」のことを伝えています。吉野川紀の川の流域連携にも様々な取組みを展開してきました。それらの視点を踏まえながら、本年度の機関誌『ぽたり』で報告してまいります。

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語
事務局長　尾上忠大

「都市」と「源流学」

前和歌山市立
雑賀（さいか）小学校 校長
市川圭造さん

森と水の源流館のオープン直後、紀の川（吉野川）の学習の一環として、和歌山大学附属小学校から子どもたちを連れて川上村を訪れたのをきっかけに、異動先の小学校でも変わらず、子どもたちと川上村を訪ね、源流や森林について学び、「つながり」を形成されてこられました。そして今年の春、定年退職を迎えられた市川圭造さんに、振り返っていただきました。

―川上村に来たきっかけは

4年生では水道や水の授業があり、地元を流れる紀の川を1年かけて探検（学習）しようと、何回かに分けて約136キロある紀の川（吉野川）の上流から河口までを訪れました。上流を求めて1泊2日で大台ヶ原へ行った帰り、大滝ダムステーションや森と水の源流館を見学し、源流館の館長の達ちゃん（辻谷達雄さん）たちと出会ったのが最初です。紀の川の源流が川上村と知り、翌年から川上村に泊まって達ちゃんの案内で水源地の森を歩くようになりました。

―川上村での体験で印象に残っていることは

水源地の森は歩くだけで、その一歩が発見と学びになるんですよ。一歩、歩くだけでぐっと音がし、枯れ草や落ち葉がへこむ。「このスポンジ、これが水を蓄えているんやで」と実体験を通じて教えてもらいました。また歩いている途中、急に暗くなって雨が降ってきたと思ったら、もう木の間から太陽の光がふわぁっと入る光景を見ながら、達ちゃんは「ここは空が見えるやろう。森はこうやないとあかんねんや」と、一歩歩く毎にいろんな話をしてくれ、子どもたちはそれを聞き逃さないように一生懸命に聞いていました。その姿がね、なかなかどこでも体験できるものではないと思いました。子どもたちにとって達ちゃん自身が山そのものだったと思います。

「体験」によって、「押しつけ」でなくなる。何を考えるか、思うかは、子ども自身。

―異動先の小学校でも川上村との交流が続きましたね

その後、和歌山市立教育研究所長の職を挟み、雄湊小、雑賀小でも、川上村との交流や体験学習は続きました。海の近くにある雑賀小学校では、上流の川上村がどんなきれいな場所なのか、その水が紀の川を下って海へ来る時どうなっているのかを見ようと現地に行きました。子どもたちは、川上村の川の美しさに感動する一方で、途中の河原にはキャンプ後のゴミが放置されてあり、自分たちの生活が自然に影響を与えていることを知ったと思います。子どもたちは実際にきれいなものを見れば感動もするし、守りたいと思うけれど、その思いが続くかというと自分たちの生活の中で忘れ、便利なものを求めていくのは仕方のないことで、川上村へ行ったからといって、すべてが解決するとは思っていません。ただ体験を通じて子どもたちは何を考え、何を思うか。そのことが重要だと思っています。

―なぜ「体験」が大切だと思われますか

教師として、私は子どもたちに人や周りに影響されることなく、自分自身で考える力を身につけてほしいと思ってきましたが、それが押しつけになってもいけないと思っています。それが体験を通じることで、子どもたちにとっては押しつけではなく、主体的なものになるんです。そして体験を通じて感じたことを蓄積していけば、その中で、自分自身で考える力が身についていくんではないでしょうか。だから体験した結果がどうではなく、体験自体が大きな意味があると考えています。川上村や水源地の森は体験の宝庫。これからも学校の枠を超えて、参加したい子どもたちが自由に参加できるような取り組みにつなげていきたいと思っています。

「川上村は体験の宝庫」
和歌山市立雑賀小学校では校長先生として同行された。

聞き手／西久保智美（コミュニティライター　公益財団法人 吉野川紀の川源流物語理事）

第44回 源流の主役たち

吉野川紀の川流域の生きもの学芸員のイチオシ！

和歌山県立自然博物館・森と水の源流館

川上村を出発した吉野川紀の川の水は、上・中・下流で多様な環境を創り出し、豊かな恵みを海へと届けます。人々の暮らしで様々に使われる河川の水は、１００種以上の魚類、１３００種以上の昆虫類など、膨大な生き物を育んでいます。そんな紀の川流域の生きものたちの中から、学芸員が選ぶ、ぜひ知ってもらいたい生きものをイチオシ！ポイントとともにご紹介します。

エゾコガムシ
体長16～18mm

コガムシとよく似ていますが、腹と脚が黒色であることで容易に見分けることができます。休耕田や河川敷に生じる低水温の浅い湿地を好みます。

ここがイチオシ！

吉野川周辺の街灯に飛来した個体が奈良県2例目ということもあり、まだまだ生息状況の調査が必要な種です。

森と水の源流館
古山　暁

ミヤマアカネ
体長30～41mm

アカネ属では唯一流水性を示し、流水環境と止

カジカ（大卵型）
最大体長12cmほど

吉野川の上流部に暮らすカジカは、大卵型と呼ばれる通り、大きな卵を産み、一生を純淡水で過ごします。かつては紀の川にも生息していたという話もありますが、現在は見られません。奈良県では「バタコ」と呼ばれ、身近な魚の1つでした。

ここがイチオシ！

ずんぐりむっくりした体形や、勢いをつけてエサをたべるしぐさがとても可愛らしいお魚です！

和歌山県立自然博物館
國島　大河

水環境の連続性が無ければ生息できないため、局所的な分布を示します。

ここがイチオシ！

ほんのり赤く色づく翅、華奢な体、アカネ属では最も美しい種とも言われます。

森と水の源流館
古山　暁

セトウチサンショウウオ
全長70～130mm

沿岸の低標高地に分布します。普段は陸上で生活しますが、繁殖期には湖沼などの止水に集まり、バナナ型の卵塊を産みます。民家近くでも見ることのできる身近な種ですが、近年、数が減ってきています。

ここがイチオシ！

目が大きく、とても可愛いらしい顔つきをしています。

和歌山県立自然博物館
高田　賢人

トビハゼ
体長35～60mm

和歌浦湾の干潟や紀の川河口の水際で見られます。眼は頭の上側に付き、胸びれは腕のように変化して体を支えるなど、陸上での生活に適した体になっています。

ここがイチオシ！

つぶらな眼、跳ね回る様子は魚らしくないですが、とても愛らしいです。冬眠の時期以外は、紀の川の河口干潟でふつうに見ることができます。

和歌山県立自然博物館
平嶋　健太郎

オオサカサナエ終齢幼虫
体長31～36mm

幼虫（ヤゴ）は細長い体型で、透き通るような黄色や緑色の体色が大変美しく、腹部に褐色の模様があります。河川中流の細かい砂や泥が堆積する流れが緩やかな場所を好みます。

ここがイチオシ！

淡い体色がとても美しく、初めて水の中から掬い上げた時の感動が忘れられません。ヤゴ採集していてこれほど興奮したことは今までありませんでした。

和歌山県立自然博物館
松野　茂富

ここではほんの一部しか紹介できませんでしたが、企画展「吉野川紀の川流域の生きもの」や各館の刊行物で吉野川紀の川流域の魅力的な生きものをたくさん紹介しています。

企画展

大滝ダム管理運用開始10周年記念
吉野川紀の川流域の生きもの
期間・令和5年7月20日～10月1日
場所・森と水の源流館2F交流広場
共催・和歌山県立自然博物館

ともに！

さて、今回は――

いきいき輝く活動をご紹介

川上村自然観察研究会のみなさんと

身近な自然が大好きな村民さんが意気投合して結成したクラブ活動で、仲間たちと日々楽しく自然観察を行っています。森と水の源流館のイベントにも積極的に参加してくださるほか、観察会講師の依頼や調査研究のお手伝い、シンポジウム・勉強会への参加、全会員が源流人会へ登録していただくなど、事業への支援をいただいています。学びの機会を求め、かわかみ源流ツーリズムや川上村立図書館の事業にも積極的に参加されています。

好奇心旺盛なメンバー

近所でよく見かけるけれど、名前を知らない植物・昆虫・鳥など生きものについて調べ、名前や生態について知識が増えることが楽しくて、次はこの生きもの、その次はあの生きものという風に、次から次へと興味が尽きません。そんな好奇心旺盛な人たちが集まってできたのが川上村自然観察研究会です。会の発足のきっかけは、森と水の源流館の観察会に参加した際、スタッフから「自分たちで会を持てば、より自然に触れる機会を多く持てる」とアドバイスされたことでした。その後の行動は迅速で、川上村の社会教育学級等補助金制度を活用し会を発足させてから3年目、学びの機会を求めて村内外で精力的に活動しています。

川上村自然観察研究会からのメッセージ

- 村内外、あちこちに出かけます。
- 会員募集中！
  現在 会員11名
- 原則、毎月4月曜日が活動日

楽しくやってます♪♪

川上村の良さを体感したくて

せっかくこんなに自然豊かな場所に暮らしているのだから、もっと自然の事をよく知り、地域の環境の変化や今まで気付かずに素通りしてしまっていた自然の魅力を感じることができれば、暮らしている地域をもっと好きになれる。そんな感覚を共有できる仲間と楽しく活動しています。観察会を通して村内および流域の親睦・交流を深めることも自然の豊かさの恩恵を享受することだと思います。

代表　中川育子さん談

時とつながる

和歌山平野を潤す〝宮井用水〟

古墳時代より1700年にわたる紀の川の水と
和歌山平野の人たちの関わりを紹介したいと思います。

和歌山平野の紀の川南岸には、古墳時代に地元豪族の紀氏（紀国造家）が開いた水路を起源とする宮井用水が流れています。紀氏は岩橋千塚古墳群（国の特別史跡）を造営した集団で、岩橋千塚古墳群では石室内に棚や梁を架けた岩橋型横穴式石室が多く用いられています。この特徴的な石室は、岡峯古墳（下市町）や槇ヶ峯古墳（大淀町）でも用いられていることから、紀氏の影響力が大和の吉野にまで及んでいたと考えられています。

図1　日前宮（和歌山市秋月）
紀国造家の神社。かつては、その年最初に取水した宮井用水の水が奉納されていました。

宮井用水が開かれた頃の和歌山平野は、現在とは全く異なった姿をしていました。紀の川は紀の国大橋付近で南へと向きを変え、和歌山城の東を流れて和歌浦に注いでいました。日前宮の辺りが紀氏の本拠地だったと考えられています。宮井用水は当初この周辺のみを灌漑するものでしたが、古代から現代まで絶えず改修・延長工事がなされていった結果、全長約28㌔、800㌶の耕地を潤す現在の姿となりました。

図2　宮井第二閘門（和歌山市布施屋）
明治41（1908）年竣工。扁額は記念碑になっています。

一方、紀の川北岸は地形の問題から紀の川の水を利用することが困難でしたが、徳川吉宗が紀州藩主の時に、橋本市から岩出市までの全長約32㌔に及ぶ小田井用水が作られました。地形を克服するため水準器を使った精密な測量を行い、ルート上の谷や川には橋を架け、サイフォンを利用するなどしています。この工事の様子は、和歌山県立紀伊風土記の丘で昨年開催された企画展で紹介されています。

図3　宮井用水の給水範囲
現在は岩出頭首工から取水しています。

吉野川・紀の川の源流は奈良県ですが川の水は和歌山県へ流れています。

大和平野は吉野川分水ができるまで水不足で苦労しましたが、紀の川が流れる和歌山平野にも1700年にわたる人々の努力と、水量が少ない年には水不足で苦しんだ歴史があります。

吉野川分水はその和歌山平野の人たちから川の水を分けてもらって成り立っています。「川上宣言」には「下流にはいつもきれいな水を流します」があり、森と水の源流館には川が生む「つながり」と「かかわり」を問いかけた展示があります。日々ひとりひとりが、水が使えるのは誰かの「おかげ」であることを忘れず、下流の人たちにきれいな水を届けるにはどうすれば良いかを考え実践してもらえればと思います。

参考文献
和歌山県立紀伊風土記の丘　2022
『令和4年度秋季特別展　紀氏、大地を開く―宮井用水と耕地開発―』

森と水の源流館　成瀬匡章

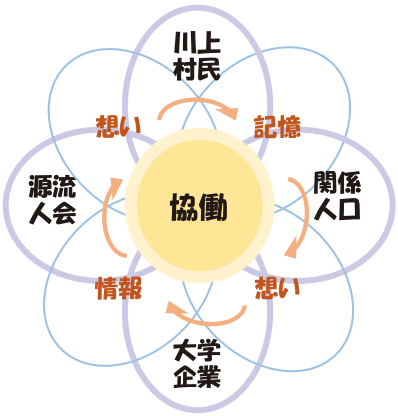
取組みレポート

快適に暮らしつづける村づくりに役立てていこう！

公益財団法人吉野川紀の川源流物語
事務局次長　髙田　裕市

ご縁をいただき、本年度からこの財団の事務局次長としてお世話になっています。外部から来た者の観点で、私が「びっくり！」と感じた点をまとめさせていただきます。

森と水の源流館には、村民や流域の皆様からの様々な想いや情報等が集まっていて、これまで当館の活動に関わっていただきました方々の積み重ねに敬服いたします。このような村民の皆様や源流人会、大学や企業等の皆様といっしょに積み上げていくいわゆる「協働」の取組みは、快適に暮らし続ける村づくりにおいて、きっと重要な役割を果たすと感じています。引き続きよろしくお願いします。



暮らしの風景を守る・育む

「水源地の森」「下多古の歴史の証人」「波津の茶畑」「高原の段々畑」「旧白屋の石積み集落」「柏木のまちなみ」「井光の地芝居を懐かしむ土蔵」などなど、どの風景にも人々の暮らしや営みが関わっていることに気づきませんか？ そしてその営みには、愛着をもって維持管理する活動、誇れる知恵や技、これを続けるたゆまない努力などがかかせません。

昭和3年作成（源流人会 湯峯様提供）

昭和3年に書き写された土地利用図、平成4年に住民の方々が記録した手作りマップなどには皆様の想いや記憶が詰まっていて、かつての暮らしの風景を読み解くことができます。

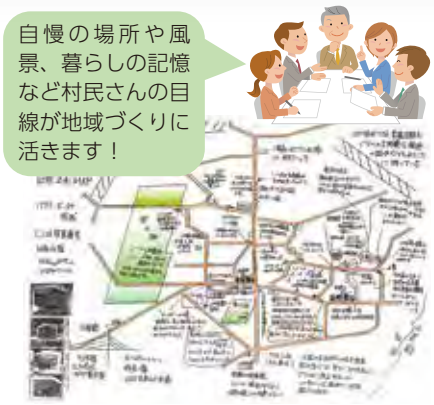
風景に人々の暮らしや営みが合わさってこそ、文化的な意義が生まれ、快適で豊かな暮らしへとつながります。暮らしの風景を守り・育み「未来への風景づくり」につなげましょう。

文化的景観ってご存じ？

日本の多様な気候風土の中で、人々は、地域の自然と関わりながら生業を立て、生活を営み、長い年月をかけてその土地ならではの特徴的な景観を築きあげてきました。このような景観を「文化的景観」といいます。人がそこに文化的な意義を感じる風景と言えばわかりやすいでしょうか。

水源地の森（令和５年撮影）

井光神社の井光区地芝居衣装蔵（令和４年撮影）

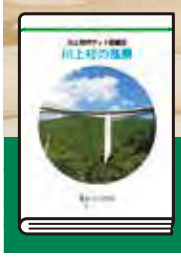


平成4年作成（源流人会 横谷様提供）

源流人募集

源流人とは　かけがえのない水を生む源流の自然とそこから海や都市へとつながる様々なものを愛する人です。

源流人会とは　集い、話し、学び、遊び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です。



2023年度入会特典
川上村ポケット図鑑
※写真はイメージです。

年会費
個人　2,000円
家族　3,000円
学生　1,000円
団体　10,000円

郵便振替
00940-1-331163

森守（もりもり）募金

にご協力ありがとうございました。

令和４年度は、196,475円の森守募金をお預かりし、環境保全啓発のためのパンフレット増刷や看板の製作を行いました。

源流域の環境保全は
みなさまの善意に支えられています。
ひきつづき、ご協力をお願いいたします。

郵便振替 00950-2-331164「水源地の森守募金」あて

表紙の写真：和歌山市大川

発行日:令和5年7月発行
発行所:公益財団法人吉野川紀の川源流物語　森と水の源流館
TEL:0746-52-0888